

遠藤保子先生を偲んで

舞踊学会会長

猪崎 弥生

舞踊学会遠藤保子理事（立命館大学名誉教授）が2021年5月6日に逝去された（享年68）。5月7日の朝、携帯電話に遠藤先生と同期の高橋和子先生（横浜国立大学名誉教授・静岡産業大学教授）より訃報を頂いた私は、その瞬間画面の文字がぼやけて見え、膝から崩れ落ちるような感覚に陥った。冷静になろうとしてもすぐには平静に戻れず、暫くは舞踊学会の今後のことを考え、いつも私に的確なアドバイスをくださった遠藤先生の面影が浮かび上がり、また大きな喪失感にかられる時間にもなった。

私は、遠藤先生とお茶の水女子大学の学生時代より親しくさせて頂いており、遠藤先生の東京教育大学ダンス部の作品に出演させて頂いたこともあった。確かデュエット作品だったが、その時の振り付けの様子を今でも思い出すことがある。その後、お茶の水女子大学大学院では、留学を視野に入れた勉学と研究に励む輝きを放つ先輩であった。月日が経ち、私がお茶の水女子大学に着任してからは、舞踊学会において研究者の仲間として長い時間を過ごしてきた。そのように若い学生時代から大学教員として後進を育てる立場になるまで一緒に歳をとってきた遠藤先生とこんなにも早くお別れしなければならないことがとても残念でならない。

ここに、遠藤保子先生を偲んで、先生の舞踊学会への貢献と舞踊学研究へのまなざしについて記しておきたい。

遠藤先生は、2002年4月から2021年5月にお亡くなりになるまでの19年間舞踊学会理事、そのうち2004年4月から2007年3月と2013年4月から2016年3月まで常務理事を務められた。また、2004年から2007年3月まで立命館大学産業社会学部遠藤保子研究室に舞踊学会事務局を置き、事務局長として学会運営を取り仕切って頂いた。

学会大会では、2005年度第57回舞踊学会大会「舞踊のフロンティアII—京都における舞踊の伝統と革新—」（立命館大学アート・リサーチセンター、京都芸術センター）においては実行委員長として開催の指揮を執り、2007年度第59回舞踊学会大会「からだ・トボスとの対話」（倉敷市芸文館 倉敷公民館 倉敷アイビースクエア）では、学会大会担当理事として支えて頂いた。

第57回大会では、大会に合わせてナイジェリア



写真1 2009年2月 ナイジェリアにて講演の合間に

国立舞踊団を招聘し、大会2日目の午後にダンス「Ekonbi（エコンビ）」と「Iri Agha（イリアハ）」の上演を実現させたことも忘れ難い。遠藤先生がナイジェリア国立舞踊団のお世話をしながらダンスを見ていた時、私もその隣に控えていた。

倉敷における第59回大会では、遠藤先生は委嘱研究発表を企画され、共同研究者ベニン大学シアターアーツ学部講師クリス・ウゴロ博士（当時）が、「からだ・トボスとの対話—ナイジェリアのダンスを事例として—」を発表した。その際、遠藤先生がウゴロ博士の発表後に説明を加え聴衆の理解を深める役割を果たしていたのが印象に残っている。また、2012年度第17回定例研究会（春季特別大会）は、遠藤先生を実行委員長として立命館大学衣笠キャンパスにおいて開催された。

このように、舞踊学会活動においては、理事、事務局長、常務理事として精力的に運営の中心となつて学会の発展に多大な貢献をもたらした、そのことが舞踊学研究を発展させる力となったことは言うまでもない。特に、文化人類学の視座からアフリカの舞踊を研究してきた遠藤先生だからこそ、ナイジェリア国立舞踊団を招聘・上演し、アフリカの共同研究者とともに委嘱研究発表が行われ、その結果舞踊学会大会が国内にとどまらないグローバルな展開を示すことができた。

遠藤先生は、一貫してアフリカの舞踊を対象として研究を続けてこられた。そのルーツは、大学院のときに文化人類学の観点から、西アフリカ・ナイジェリアの現地調査をしたことにあると聞いている。その後も何度かアフリカの各地に足を運



写真2 2012年3月 ガーナの小学校での講演

びフィールド調査を行っている。そうした成果は、舞踊学研究において大きな足跡を残している。

文化人類学からアフリカの舞踊を研究してきた日本で第一人者でありこれからの活躍が期待されていた遠藤先生という大きな存在を失ってしまったことは、舞踊学会、ひいては舞踊学研究にとって大きな痛手である。私たちは、遠藤先生の舞踊学研究へのまなざしを忘れずに、舞踊学会の発展とともに舞踊学研究を深化させていかなければならない。

私は遠藤保子先生と学生時代から共に歩んできた時間を、終生忘れることはないだろう。

注) 2枚の写真は、共同研究者の高橋京子氏（フェリス学院大学）よりご提供頂いた。